

学校的「自己」形成

原 野 利 彦

Self-image producing in school

Toshihiko HARANO

【問題意識】

日本の近代学校教育は近代西欧的眼差しによって「自己」を形成することを原理としてきた。だから我々は、この文脈に於ける「自己」という呪縛の中で「自己実現」や「自分探し」を試みている。しかし我々は日々話す言葉にも、行動の習慣にもしっくり来ないものを感じつつ生きている。借り物の言葉と感情に苦しみ、或る者は、近代的視線の中で像を結んでいる「自己」をほぐして、自分を取り戻す過程を、権力構造からの解放に求め、他の者は「異質性の尊重」や「多様性の重視」に「教育改革」の方向を求めたりする。

しかし前者はヘーゲルに典型をみるように、同一性の戯れとしての他者との弁証法的構造の中で蠢いているにすぎない思考であろう⁽¹⁾。「主と奴の転換」というような、他者性が同一性への戯れでしかないような学校的対話は我々を貶め辱めるだけである。後者についても、他者性がいつでも共通性や同一性に吸収され互換性のあるものに変形されてしまう「市場原理」的構造を持ち、それが屈辱感で我々を打ちのめす。我々は決してヘーゲルの「主と奴」の転換の論理や「市場原理」の中での飼い馴らしを求めているのではない。それは他者をエグゾティズムの眼差しによって束の間の「驚き」の客体とし、やがては同化吸収することによって、観光資源的学習対象にして、他者性を市場経済に巻き込んでしまうのだ。「多様性」や「異質性」の重視の掛け声のもとに、他者をエグゾティズムの眼差しのもとに置き、平板な言葉で他者の内面や言葉を篡奪し、絶望的な苦しみを与え続ける教育は告発さるべきである。学校的につくられた欲望の媒介として利用される異質性、つまり他者像は或る既知の者に一緒にされた人工物にすぎないのである。教師はロビンソン・クルーソーのように子供をフライデーとして語らせているのかもしれないと自問自答すべきである。

しかし、他者とは或る文化（差異化の体系）を選び取ったときに成立するものである。他者とは、或る文化の内外にいる者にとってのみ存在する。我々は他者性を内側からの「外」として措定し続け、これを生き抜くことによってのみ他者性、「外」を獲得し得る。絶え間なく与えられた言葉や感覚に対して、絶えず「否」と囁き続ける内的なもので応答すること、これが学校的被植民地的生き方を強いられる「主体」の生きざまであろう。リベラルな学校的認識論的暴力との闘いである。

1. 領土化・土着を正統化する文脈での「個性」

準拠すべき社会基準・正統性（その社会の持つ寓話・儀式のシナリオ）が揺らぐとき、

自らを位置づけ、意味づける「情報」の重要性が今までとは違った様相のもとに置かれる。或る人々は土地の領域を占有できる神話（発生・継承の神話）を新たに形成し、そこへの土着の正統化を再定義しようとする。これは時として民族紛争を激しく徹底したものにする。民族の起源と血筋の神話、或る文化内の諸構造を説明する神話、そこから生じる軌轢などに関する深層的な神話などが新しい装いを持って簇生する、それは「新たな学問」的歴史意識として登場する。

特に現代の技術先進国においては、すべての事象の科学技術的言説が全神話時空間を占領する。それは「情報」の名による記号・形式によって全世界を「実現」し、支配しようとする。安全やスピードという機能面の寓話やモードの寓話、ケアの寓話が絶えず更新されつつ、成員の生活を再構成していく。そこでは、恐怖や危機をもたらす事態、つまり「悪」は科学技術的に徹底的に透明化される。悪は「技術的に克服されるべき」問題へと変換され、芸術がその宣伝係を務める。そしてその科学技術的寓話が「体験」として成員に意識化される。教育もその方向で徹底化される。この「体験」は形式化され、教育の目的・内容とは伝統的なそれとは無関係な所で教育ゲームとして行われる。それは偶然に隣接する諸項が減速しあい、癌細胞的に増殖する教育ゲームとして展開することで「世界市場」に形成し得るのである⁽²⁾。

しかし、このゲームを脆弱なものと受け取ってはならない。学校なり、企業なりで行われる教育は、それが瑕疵のないものであり、教育的系統性をもつものであると見せかけるいわくありげな社会的・言説的装置によって支えられているのである。楽しげなゲーム形式であれ、しかつめらしい学問的言説であれ、それは「世界市場」という表層で全世界を覆い尽くすゲームとして機能するのである。それらは意味ありげに論じられ、批評され、魅惑し、楽しまれるのである。学校においても、TVにおいても、異質なものは、「意外」、「発見」、「探検」などの用語によってエキゾチックなものに凡庸化され、観光客の人間を大量に生産していく。

勿論、現代を特徴づけて、「歴史の終焉」とか「価値の遺伝コードにさえ従わない秩序＝クローンの増殖」などという現代文化の無方向性の素振りを強調する見解もある。だが、それらが「市場経済」を普遍的な歴史意識として自文化（特にアメリカ文化）を拡張しようとする神話の上に成り立った言説であることも明らかである。つまり、科学技術的透明化は、市場経済を前面に押し立てる民主主義という神話の上に成り立っているのである。普遍性の概念は市場経済、科学技術の眼差しのもとにすべてを透明化しようとする野望を示すものに他ならない。「同一物の分裂による増殖、不死で無性的な存在の段階」のように見えることは、現代の先進文明が他文化に対して寛容ではないことを示している。市場経済に囲ま込まれた民主主義と科学技術以外を認めないクローン化である。

2. 「複雑性」、「不透明性」による抵抗

この市場経済のもとで、人々は消費の担い手以外の役割を剥奪される。エロスは表層化され、健康と衛生、ケアの政治学的言説によって、市場的役割への帰属を拒否する叫びを覆い隠す。子供たちは、与えられた言語、身振り、身なりで仮面をかぶり、集団内で一定の位置を占めようとする。それは権力の序列でもある。力づくで義務化された教育言語によって反抗の叫びや言辞を駆使する能力は徹底的に排除され深層に潜る。言語を変形し、

この言語を多重化して自分たちのコミュニケーションを意味あるものにする試みも、「市場」的言説に巧みに組み込まれてしまう。「裏わざ」も篡奪されるのだ。コンピューターは離散しているこれらの言語の多重性を接続するどころか、「情報化」し市場化する。反抗の言語は徹底的に離散化する。

子供は不登校によって内的に、または外的に亡命する。毎日登校している子供の中には不動のまま難破している者もいるにちがいない。彼らにとって「学校教育改革」を叫ぶ者は、奴隷制度擁護論者に見えるだろう。「複合性」、「不透明性」で子供たちは自らを守り反撃する。「子供が見えなくなった」という教師の言葉が、これを裏書きしている。我々はカオスが定数であり、合理性が例外であることを知らねばならない。罫い、ゲッターを炸裂させる夢想の「旅」を子供に促す教育学が求められる。

しかし「市場的」言語は強力である。この言葉のもとで、人は「素肌」を曝し支配される。市場経済に依拠する権力は、視線を素肌にまで及ぼし、内的健康をチェックする。この視線による検閲に耐えるために、人は大量の化粧品や薬剤を消費しなければならなくなる。人は「肌」の担い手にまで抽象化される。肌の色による差別が隔々にまで行き渡るのだ。化粧品の言説は魅惑的なカタカナに満ちたものとなり、現代性を訴求する。医薬品を連想させるアイコンや言説が化粧品を取り巻く。新大陸「発見」と同様に、投資の対象として発見された「素肌」は薬学という科学に裏づけられなければならないのだ。「素肌」は内面の健康と外見への視線によって支配され揺れ動く境界となり、それだけに絶えざる消費が可能となる「土台・新大陸」となる。良い皮膚こそ化粧の真の対象というわけだ。そこでは「白さの優越」が誇張され、それは肌のみならず、歯にまで及ぶ。歯質を保全し、歯石を取り除き、琺瑯質を保護し、口臭を防ぎ、ついでに虫歯を防ぐというわけだ。各人の身体や肌の特性が強調され、境遇、職業、年齢などの社会的属性が細部にわたって多様に差異化され、商品販売のターゲットとして絞り込まれる。老いと死を恐れさせ、それを遅延させる強迫のもとに、「生き生きした」肌づくりが義務化される。老いや死に逆らって生きようとする「力み」が集積されて「自己」なるものが形成される。肌は自分を検証する「鏡」である。身体・肌への「限りない配慮」と「脅迫」によって、人々は生産と消費のサイクルへと組み込み込まれる。これが「主体化の形式」である。つまり女性の義務＝肌への配慮＝自己への配慮である。メディアは racial culture として自己への配慮を脅迫し続ける。これが「精神・生活の活性化」が全面を覆い尽くす世界が実現する。「肌」の「清潔・生き生き・きめ細かさ」を配慮するとき、人は豊かで生き生きとした生活をおくることが出来るという「肌」中心の「実践」的言説の組織化される。生命ある美の神話⁽³⁾。

このような意識化はどのような責任の取り方を可能にするのか。他者の身体をめがけて徹底して投資し消費対象とする行為の責任を。また同様の論理によって子供を教育する責任を。他者に対するその眼差しは投資対象としての持続性を保証するような身体の担い手以上のものを相手に見出さない。

3. 戸籍上の名前による「個性」の統制

ところで、子供には多様な役割が「個性」などの名において許されているように見えるが、実は戸籍上の固有名だけが許される一義的な役割に押し込められている。そのシナリオなどは学校的・市民的舞台を成立させる力学的理性によって制御されている。それは場

や状況と関係なしに成立する主体（絶対主体）と、主体との関わりなしに成立する客体（絶対客体）を虚構するものである。これが今や、「状況」を無視するものとして批判されている。つまり、均質化された力学的世界観を越えて、状況の質を重視し、世界の複雑性に迫れということだ。ところがまさにこのことが「市場」への誘導として機能する言説なのだ。

4. 子供にとっての「状況」とは

子供にとっての「状況」とは一体どんなものだろう。勿論それは等質的時空（絶対時間）のどこにでも位置づき得る主体、客体という世界観は、場を無視し、機能（働き）のみを重視する学校であり、都市空間である。それは都市を居住空間、労働時間、遊び空間、医療空間、学校教育空間などの機能（働き）において区分し、個々の生活時空を捨象する計画的思考によって支えられているものである。だが他方では、「質化」された民衆的・庶民的生活や文化のように見えるものも、実は市場に収斂する「質」にすぎない。それは「売れる特質」であることが求められる「個性」的「質」でなければならない。「美」、「力強さ」の神話によって庶民の仮面をつけた者による支配に屈することである。市場はその支配力を「情報」によって実現する。「媒体」は身をこすりつけるように個々人に迫ってくる。携帯電話、双方向通信、マルチメディアなどが「情報文化」的雰囲気をつくり、それによる近接・隣接が情報の接続・拡散を加速化する。諸断片による「情報」が脈絡なく接続、減速、加速しては消滅していく過程の所々で、束の間の牧歌的時空間が演出される。

「参加」とは再定義の能力と資格をもった者が形成する「場」ではなくなり、イージーに誰でもアクセスできる「場」となっている。血の気のない者が「意欲的に」と叫ぶ「場」なのだ。病気をケアしあい、環境汚染を嘆いてみせる批評家の「場」なのだ。再定義の力量を試される「場」でもなく、変換の力業が必要とされる「場」でもない。ひたすらイージーにアクセス出来る「場」であり、それは思考しない群衆の雲、霧の世界である。断片化された「情報」の洪水の中で、度を失い狂暴になった民衆が相互に残忍になる世界が、子供の「状況」なのである。

コンセンサスという名の「世論の支持」によって形成される世界で子供たちは窒息している。子供たちが語彙を変形し、明白な意味を変形し、徐々に不透明で曖昧模糊とした時空間をつくっていることに「世論」的教師は気づかない。町や村、野山を駆け回る腕白など、もはや無効になった貧弱なイメージによって裁断された「望ましい」子供の姿。小市民的な小型ビジネスマンと化して、スケジュール手帳をめくる子供たちに、スラムのユリシーズを求めても無駄である。隷属からの逃亡者としての不登校児と、逃亡できぬままに学校に留まる子供たちとの間の不可視の交流は新たな文化を育みつつあるかもしれない。つまり、不登校児の失語、叫びと、塾帰りの子供たちの間で交わされる「口承的文化」との接合である。子供たちは遠い過去の猥たる記憶を細々と辿りながら、強いられた学校的「児童」・「生徒」用語で成り立つ「文化」に耐えようとする。しかし、今の学校教育は暴力・エロスの儀式への「参加」を可能にし得る台本・舞台・道具を骨抜きにし、子どもを更に深い闇に追い込むだけである。また学校は巨大な宇宙の中での「自己評価」を妨害する装置でもある。巨大な宇宙の中での「体験」も、巨大な宇宙の中での「個別性」も奪う。変換・コピーはコンセンサスという名の凡庸化へと回収されるだけだ。だから「暴力」

を伴うエロスの力は儀式性を帯びて現出しつつある。しかし、この儀式性は国家理性的な裁判によって《始—中—終》が演出され、内容は篡奪され子どもたちを萎縮させる機能を果たす。子供たちは Identity を学校文化の境界線上で調達しなければならない。自らの正統性を成す材料を内なる外の「情報」による学習によって獲得しなければならない。子供たちは14番街のようなゴミ溜のユリシーズたらんとして「暗い春」を生きていく。

教育用語によって覆い尽くされた世界。そこでは子供も大人も言葉を失っている。というよりも奪われている。西欧的眼差しは他者を客体化し物化することによって透明化しようとする。他者は不透明になることによってのみ「自己」を保持しようとせざるを得ない。ハエのブンブン飛ぶような私語によって学校を占領しようとする。しかし、身体は「素肌」として透明化され、商業化されたステレオタイプの「若者の叫び」が演奏会場を埋めている。テレビニュースやドラマは小市民的「説教壇」と化している。平板な言葉と身振りが我々の内面と言葉と身振りを篡奪し貶め辱める。新聞やTVの解説者の言葉に満ちた帽子をかぶって賢そうに見せかけようとも、それがどんなに精巧なものであっても漫画的なものに終わる。如何に遜色のない学校用語を駆使しようとも、他者を客体化し物化する言語圏に囚われていることは否定できない。先進科学を担い得る日本語を鍛え上げてきた学校用語は排除すべき如何なる理由も持たない。血液製剤、臓器移植、遺伝子治療を巡る科学用語は限りなく政治的なものでもある。方言の見直しは多様な文化を「根掘ぎ」にしないという異質性共存のアリバイづくりである。それはテレビドラマの方言指導にも似た人工的な身振りによって一般化された図式や規則を越える過剰なものを迎え撃ち幽閉しようとするものである。体験と行為の可能性は顕在化できるよりも常により多くの事柄の存在を意味する過剰性は、剰余への着目と飛翔への誘いを生むはずだが、学校教育はそれを選択の強制へと回収させる。

学校教育は狂気への溯行を予防し国家理性を貫く強力なシステムである。それは狂気への探求を市場経済へと誘導するために、それを単なる娯楽へとすり替える。それは色彩に富む世界を平板な塗り絵の世界に変貌させ、そこに安住すべく安逸を旨とする幸福神話を流布させる。慈悲心に満ちた無限のケアの世界像を崇める奴隸的人間をつくりだす。それが近代が発明した自律する人間神話の真の姿なのであって、決して自立する人間の崩壊を意味するのではない。つまり、自立する個人を前提する世界とは、自立しない個人への無限の介入（カウンセリングなど）を可能にすることによって、自立などあり得ないことを思い知らせるシステムである。

5. 奇跡としてのコミュニケーション

我々は近代的理性が諸断片を切れ切れに繋ぎ合わせ、あたかも滑らかに繋がっているように補正する作業であることを知っている。カオスこそ普遍的なものであり、力学的理性はまさに奇跡的に成立しているものだということを知っている。世界中に「独立国家」が成立するようになった時、それを押し進めてきた「科学的理性」という世俗化された偉大なる媒介者がその抽象性と大雑把な性格を露呈させられるはめに陥った。世界のグローバル化とは、求心的に西欧という文化の「起源」に収斂させようとする代わりに、むしろ散種された状態で、それぞれの「個別性」を徹底させる方向をとる素振りである。勿論それは「個別性」の徹底の情念を市場経済によって翻訳し絶えず平板化していく過程であるこ

とは言うまでもない。

「社会はその環境世界とコミュニケーション出来るのではなく、その環境世界を通してコミュニケーションできるのである」⁽⁴⁾ とする考えは、市場経済の制覇を肯定する極めてイデオロギイ的なものである。それは市場経済の不在は「コミュニケーション」の不可能を意味するという恫喝に他ならないからだ。それは大いなるものへの参加としてのコミュニケーションを不可能にした近代的理性への「社会学」的居直りである。シンボルを不可能にすることによって悲劇を不可能にし、コミュニケーションとは奇跡であることを見ようとはしない近代人の思い上がり、ニーチェの言う「末人」の思想に他ならない。

それどころか現代人は「情報」、「伝達」、「理解」の3要素をデッチあげ精巧なものによって、社会が奇跡の連鎖として示すことを避ける。だからコミュニケーションの断絶はあってはならない不祥事であり、回復されねばならないものという強迫観念を散布することにもなる。これは深い絶望から来る隠蔽である。太古の人々は神とのコミュニケーションが奇跡であることを知っていた。だからこそ生贄の祭りを絶やさなかった。膨大な諸断片からなる渦巻き、ブラウン運動としての大衆社会は至るところに犠牲者を見つけては群がり、見物し貪る。社会概念の拡張によって、コミュニケーションの可能性があたかも自明であるかのように「社会的に」振舞うことが我々には出来るだろうか。つまり神とのコミュニケーションを人間の側から論証しようとする企ては可能だろうか。否、その「企て」という発想自身が畜群の人間が内側に「外」を見ようとする笑うべき姿なのではないだろうか。果たして畜群の人間は内側から神とのコミュニケーションの可能性を論証しうるのか。確かに人間はコミュニケーションを任意に選ぶことは出来ないという意味に閉じ込められた秩序において社会を形成する。コミュニケーションが止むところでは社会も終わる。だが我々はコミュニケーションそのものを選ぶことも排除することも出来ぬ畜群として生きる以外には存在することが許されないのだろうか。我々は自分で選んだ速度と順序で物事をするを許されない事態に陥っても死を選ばない畜群としてとどまる存在でしかないのだろうか。

註

- (1) ヘーゲル「精神現象学」(自己意識—主と奴) 榎山欽四郎訳 河出書房 1966年
- (2) J. ボードリヤール「透き通った悪」(ラディカルな他者性) 塚原史訳 紀伊国屋書店 1991年
- (3) 内田隆三「資本の言説としての〈肌〉」現代思想 1994年12月号(青土社)
- (4) N. ルーマン(宗教論)(第一章) 土方昭, 土方透訳, 法政大学出版局 所収1994年